

台湾における近代医学に影響を与えた日本人

——産婦人科の場合——

王 敏 東

銘傳大学応用日本語学科

受付：平成21年2月3日／受理：平成21年9月11日

要旨：本稿は、台湾において日本統治期（1895～1945年）に創立された、近代医学の産婦人科に影響を与えた歴代の責任者を描くものである。初代医長の川添正道をはじめ、迎諧、真柄正直の3名である。

日本統治期における台湾の病院または医学部産婦人科の3人のリーダーは、各々そのかかわり方や個人の人々の生涯はさまざまであるが、台湾の近代産婦人科の創立・発展に大きく貢献したことに違いはない。時期でいえば、川添は草創期、迎は臨床の隆盛期、真柄は学術研究重視期、という区切りができる。3つの時期ともその時代の背景を反映し、まさに台湾における近代医学（産婦人科）そのものの発展軌跡と重なっている。

キーワード：台湾、産婦人科、リーダー

1. はじめに

清の一部だった台湾では、日本人上陸以前は中国伝統の漢方による医療が行なわれていた¹⁾。1895年に、日清戦争で負けた清は下関条約により台湾を日本に割譲した。以後半世紀にもわたる1945年までの間、台湾は日本の統治下にあった。1895年6月に台北に進駐した日本軍は、即時かつ実際の必要に応じ、直ちに「大日本台湾病院」を設けた。この病院を出発点とし²⁾、後に発足した医学教育部門³⁾と共に発展してきたものが、現在の台湾大学医学部である。この、日本人によって作られた医療体系は、日本で受け入れられていた近代西洋医学である。1945年に国民党政府に返還された当時、台湾における医師の7割以上はこの系統の出身者であった⁴⁾。

そのような医療体系の専門分野の1つに、人類の半分を占める女性を専ら対象とする産婦人科（1898年に外科から独立）がある⁵⁾。現在「台湾大学医学院婦産科」の歴史は台湾における産婦人

科の歴史の原点だとまでいわれている⁶⁾。

産婦人科は命の起源を探究する部門であることや、病・死など暗い出来事の多い病院で、唯一新しい命の誕生というめでたいことに包まれる科である、ことなどにより他の科と異なっている。

本稿は、戦前のまだ保守的な社会の雰囲気の中で、病気がひどくなるまで決して医者に見てもらおうとしなかった女性を相手とする当時の産婦人科が、どう展開・成長してきたかを検討したものである。具体的には台湾の日本統治期（1895～1945年、以下「日治時期」）における台湾初の産婦人科の歴代の主任を中心に述べる。

2. 台湾における産婦人科

中国の漢方には古くから「婦科」がある。たとえば『医学源流論』（巻下）に「婦科論」があり、「婦人之疾與男子無異惟經期胎産之病不同……以經帶胎産之血易於凝滯故較之男子為多故古人名婦科」云々とある。同じく『医学源流論』（巻上）の「胎産論」にも「婦科之最重者」とある。

一方、日本人によって作られた最初の産婦人科は西洋医学系統のものであるが、産科に力を入れた努力が見られる。1898年に台北病院に創立された台湾における最初の産婦人科でも、たとえば初代医長の川添正道がとくに産科に貢献したと見られる。氏は産婦人科専門の医者を教育したばかりでなく、1907年に助産士講習所を作り、氏の任期内1914年までに二百人あまりの助産士を育てた。川添の次に来たこの科の責任者は手術が得意な迎諧である。迎諧が医長であった時期(1914-1937)の台北医院は東洋一とされ、産婦人科医局が5人、ベッド数が60を超えたという⁷⁾。ほぼ同じ時期に台湾では女性が産婦人科に行くことに対する抵抗が漸次弱まり、産婦人科の業績(患者数と収益)は病院設立以来規模最大2科の内科と外科と競いあう状況だった⁸⁾。1936年に台北帝国大学⁹⁾医学部の成立に伴い、1937年、迎諧の代わりに、東大から真柄正直が講座の教授兼医長として迎えられてきた¹⁰⁾。真柄は研究中心という大学らしいやり方で産婦人科専門の人材を訓練した。終戦まで学科のリーダーであった真柄は一生懸命頑張っていたが、任期の8年間で戦争の時期に当たったため業績が十分に上がらなかったそう¹¹⁾。

台湾総督府の官報である『台湾日日新報』では1901年8月1日に「台北医院の昨今」という報道ではじめて「産科婦人科」という語が見えた。また、台湾における歴史が最も長い医学専門誌『台湾医学会雑誌』¹²⁾ではじめて作者の所属が「台北医院産婦人科」となっているのは1905年である¹³⁾。ちなみに、該当誌で初の産婦人に関する論述は1903年の堀内の「麻刺里亞ニ因スル産褥性過高熱ニ就テ」である¹⁴⁾。

以下、川添正道、迎諧、真柄正直という台湾における近代医学の産婦人科に大きな影響を与えた3人の日本人について、3つの節に分けて論じる。

2.1. 川添正道

台湾大学医学院附設医院が編纂した『台大医院壹百年』(1995: 76)によると、台湾初の産婦人科(1896年台北病院)の初代責任者川添は赴任した時、わずか24歳で、翌年(1897年)、台湾総督府

医学校の助教授ともなった、という¹⁵⁾。一方、前掲書よりやや遅れて刊行された『台湾医療史—以台大医院為主軸』(1998: 200)には台湾における産婦人科は1898年に外科から独立したとある¹⁶⁾。

『台湾新報』では1897年2月2日にすでに「川添正道任台北県台北病院医員」という「官場記事」が見られ、氏がそれ以前に台湾に来ていたことが判明する。また、1897年10月10日の『台湾日日新報』「台北医院の医員」という記事によれば、当時の川添正道はまだ外科に配属されており、同紙の1898年4月12日、1900年3月28日でも、氏はやはり「外科」所属扱いにされている¹⁷⁾。

川添の病院(医局)での身分としては、1899年5月18日の『台湾日日新報』に「台北医院医員川添正道……」とあるように、当時川添が医員であったことが分かる。また、1901年8月27日、1902年9月13日、1904年10月30日、1904年11月1日、1904年11月25日の『台湾日日新報』で見られる川添正道はいずれも「医員」となっている。ただし、『台湾史料稿本』に1898年の川添に関する「台北医院長及医員ヲ任命ス」という記載によれば、その時点で氏が単なる医員でなく、台北医院長をも兼任していたことが判明する。

一方、川添の教職としての身分は、1899年5月18日の『台湾日日新報』に「台北医院医員川添正道……は医学校助教授に任せられており」とあるように、その時点で助教授となったことが明らかであり、1904年9月6日の同紙で「教授」になったことも分かっている。

ところで、『台湾医学会雑誌』に著者が「川添正道」となっているものは15回(1905~1914年)あるが、その所属、肩書きなどは一切明示されていない。それより早い『台湾医事雑誌』には、川添による2本の論著が残されており、それぞれ1巻7号(1899年8月)の「麻毒性撰護性炎ニ就テ」と2巻6号(1900年7月)の「本島人ノ脾臓ニ就テ」である。後者には川添正道が「於台北医学校」に所属することも同時に掲載されている¹⁸⁾。

川添の台湾滞在中の最大の貢献は、1907年に助産師講習所を設立したことだとされている¹⁹⁾。この功績は1906年11月14日の『台湾日日新報』

ですでに「川添ドクトルの主唱にて本島人産婆を養成する事一時其筋の議にも上りしが計費の都合上表立ちて養成所を設くるに至らずただ台北医院産婦人科に於て十三名の本島女子を採用して事務の傍ら右助産に関する学理と実際とを教授し居れり……」と披露されている。

このように、台湾の産婦人科の発展上大きな役割を果たしている川添であるが、その名前は『台湾人物誌』には見当たらない。

川添の帰国について、台湾大学医学院附設医院が1995年に編纂した『台大医院壹百年』によると、川添は1914年に母校の長崎医科大学の教授としてスカウトされたためであるという²⁰⁾。ただし、1914年7月3日の『台湾日日新報』に「先頃医学博士の学位を授けられたる台北医院医長川添正道氏は今回愈々冠を掛けて郷里長崎に病院を設立することとなり来る十三日出発の筈なるが同氏は二十四年第五高等學校を卒業し一時長崎病院に医員たりしが二十六年沖繩病院に転し二十九年九月台北病院の設立せらるるに当り其医員として來台し爾來茲に十有九年専ら植民地に於ける医事衛生の爲めに貢献し其間前後二度歐洲に遊学して學術の蘊奥を極め遂に本年四月二十一日を以て名誉ある医学博士の学位を授けられしが同氏は是より先き既に郷里長崎に医院開設の意あり遂に今回本島を去るに至りしが総督府医学校生徒の如きは痛く之を惜み屢々留任を懇願したりと云ふ以て其学徳の深きを知るべし」と報道されており²¹⁾、台湾大学前掲資料の内容と異なっている。それより1日早い1914年7月2日の『読売新聞』では「台湾総督府医院医長兼台湾総督府医学校教授博士 川添正道依願免本官並兼官」という簡潔な「叙任辞令」が見られる。これらの報道で、川添が管理職になっていたことは分かる。

川添が帰国してからのことについて、1928年3月31日の『読売新聞』「学園展望 慶大の巻」に見られる「婦人科の川添博士」は川添正道のことだと思われるが、フルネームが掲載されていない。一方、川添の子孫が経営している四ツ谷・川添産婦人科によると、「昭和10年（1935年）、慶応大学医学部産婦人科の初代教授だった。定年の

後、新宿・四谷の地に産婦人科医院を開業。以後70年にわたって、家族4代にわたるといふ。」²²⁾という。また、篠田（2003）²³⁾の「昭和2年（1927年）3月、母校の慶応義塾大学医学部を卒業して若い医師となり、母校の産婦人科学教室に入局して川添正道主任教授の下で産婦人科専門医師としての指導を受け、東京四ツ谷信濃町の慶応病院の若い医師として勤務した」という記述とあわせて見れば、川添は1927年に慶応に在籍で、1935年に開業したとうかがえる。なお、1934年4月22日の『台湾日日新報』に「前慶大医学部産婦人科部長 医学博士 川添正道」の「初生児の皮膚の清潔に就いて」が掲載されており、氏がその時には慶大医学部産婦人科部長から降りていたことが分かる。これは川添が1914年台湾を離れた後、唯一『台湾日日新報』で川添正道という名が見られるものである。

現在台湾大学の図書館に、川添の著書として『簡明産科学』（1939（三版増刷）、金原商店）等が所蔵されている。また、川添の学問の功績として有名なのは、台湾時代ドイツ留学の際に発表した川添式尿管切断の場合、結紮側の腎機能を安全に廃絶させることを目的としたが、今は行なわれないようだ²⁴⁾。

また、黄思誠等が『台大医院婦産科百年史料輯録』（1995）を編集する際、医局に川添の写真が1枚もない、息子の川添太郎が提供したのは僅か4枚だけだったと述べている²⁵⁾。それらの写真に『台湾日日新報』（1914年6月26日）に載せているものが含まれていないため、文末の付録として添付する。

2.2. 迎諧

『台大医院壹百年』（1995）によると、迎諧が1914年より産婦人科の医長に就任したという。確かにほぼ同じ時期の1915年1月31日の『台湾日日新報』に「台北医院婦人科医長迎諧氏」が「産婆展覽二会」という記事で見られる。また、1919年8月8日に「新たに得たる 迎医長の談」という氏が博士号を取得した記事が掲載されているが、冒頭の「台北医院の内科医長にして医学専門

学校の教授たる迎諧は今回多数の同窓者中第一に博士の月桂冠を贏ち得たるの人」と分かるように、当時の迎は内科医長だった。また、同記事には氏が長崎医専出身で、京都大学で博士号を取得したこと、外国へ留学するなら米国より欧州の方に先に行きたいという希望を持っていることなどの情報も載せられている。その後、たとえば1925年9月18日同紙の「博士列傳 [一二] 医学博士迎諧氏」により、氏の「明治四十一年京大出」「県立長崎病院の産婦人科部長、長崎医専の教授」「大正三年台北医院の産科 婦人科医長」という経歴が分かる。

迎諧のことは前掲の『台湾日日新報』に1915年以来何回も報道された以外、『台湾人物誌』にも取り入れられている。さらに『台湾教育』には、氏の「大正三年七月三十一日、台北医院医長兼台湾総督府医学専門学校教授として赴任、爾來二十一年餘、本島における産婦人科患者診療に従事すると共に、医学教育に尽瘁し、本島医学界に尽したる功績顕著なり」という略歴並びに功績とともに、「全島教育功勞者」として表彰されたことが明記されている。

『台大医院壺百年』(1995: 77)によれば、1936年に台北帝国大学に医学部が創立されるのに伴い、1937年に迎諧の代わりに、東大から真柄正直が講座の教授兼医長として迎えられた。迎が台北帝大医学部産婦人科講座に入れなかったのは、当局は迎が研究にさほど積極的でなかったからだという²⁶⁾。取替えられた迎諧は暗然と医局を出て、病院からあまり遠く離れていない中山北路で迎産婦人科医院を開設し、暫くしたら、「台湾に我要らざるか」という気持ちで東京に帰ったそうだ²⁷⁾。ちなみに、迎諧の正式の退官時期は1938年3月26日である²⁸⁾。

『台湾医学会雑誌』に迎諧の名は1914年より1937年までの期間に全部で17ヶ所見られた。その肩書きまたは所属は1931年の「新竹医学専門学校産婦人科」、1933～1936年の「台北医院産婦人科」、1937年の「台湾総督府台北医院産婦人科(科長迎諧教授)」を含む。一方、台湾または日本の各図書館に迎諧を作者とする蔵書は見当たらず、

迎諧はどれも著書を残していないようである。

2.3. 真柄正直

現在日本医科大学学長(2003-)の荒木勤²⁹⁾(2007)によると、「真柄正直教授は一九〇〇年十一月七日、三重県のとある片田舎で出生された。現在存命ならば一九〇〇年生まれのために、生誕一〇七歳になると即答できる。一高東大をストレートで進み、首席で卒業した。三重県はじまって以来の秀才と噂された。東大卒業と同時に、同大学付属伝染病研究所(以下、東大伝研という)に、一生を細菌学免疫学の研究に捧げるべく一大決心をされた。しかし、何年か後に、ご家族の事情、とくにご両親が強く臨床医になることを希望された。親思いの先生は研究に対する気迫は充分であったが、ついには臨床医になることに同意した。東京帝国大学産婦人科学教室(主任 磐瀬雄一教授)の門を叩いた。とは言うものの、研究に対する旺盛心は消え止まず、臨床の合い間をぬって、東大伝研に通い続け、細菌免疫の研究に没頭した。」という³⁰⁾。

真柄正直の名は『台湾日日新報』では、1936年8月18日の「督府辞令 八月十七日……上京を命ず 台北帝国大学付属医学専門学校教授 真柄正直」、1936年9月18日の「真柄教授渡欧【神戸十七日発本社特電】」、1938年3月23日の「医学部の新陣容 六つの講座を新設 台北帝大医学部は愈々来る四月一日を以て始めて第三学年の教授が開始される所となつたが、其の結果新たに六つの講座が設けられ其の教授も左の諸氏と決定、既に任命せられ新陣容が整へらるることとなつた……産婦人科 医博 真柄正直」、1938年4月14日の「人事 真柄正直氏(台北医大教授)在外研究中の所三月帰国、この程着任した」、などのように提示されている。

真柄は正式に台北帝大医学部産婦人科教室のリーダーとなったのに伴い、専門の細菌学にかかわっている「産婦人科ニ關係アルニ、三細菌學ノ問題」を『台湾医学会雑誌』(1938)に掲載するようになっている。また、台湾産科婦人医学会の機関誌である『台湾産科婦人科学会会報』の編輯

兼発行人ともなっていた³¹⁾。なお、「妊婦を免疫することによる新産児並乳児の伝染性疾患の豫防」で日本学術振興会より研究費の補助を受けた³²⁾。

真柄正直は産婦人科関係のものだけでなく、元の専門である細菌学関係の本や医学辞書も書いた。その結果、『補習医学講座 産婦人科に於けるアレルギー疾患並に現象』(真柄正直講述(1942), 金原商店), 『嫌気性細菌学』(1947, 南條書店), 『最新産科学』(「正常編」1950; 「異常編」1950 第二版, 1958 第七版, 文光堂), 『腔式手術』(1957, 南山堂), 『子宮頸癌の手術』(1959, 金原商店), 『婦人科学』(1962, 南山堂), 『産褥の生理及病理』(1955 (中島精・樋口一成・真柄正直等編『日本産婦人科全書』第25巻), 金原商店)などが現在台湾大学図書館に所蔵されている。辞書は妻の真柄婦美³³⁾と同編の『英和医語中字典』(1953, 文光堂)が台湾の国家図書館に所蔵されている。さらに、真柄正直著・王義雄訳(1978)『産科手術』(徐氏基金会)という氏の著作の中国語訳本³⁴⁾も台湾の数多くの図書館におかれている。

また、真柄のことは『台湾人物誌』に収録されている。

1945年、日本の敗戦により、台湾は国民党政府に返還され、台北帝国大学は台湾大学となった。当然のように、元統治者の日本人が直ちに帰国することになる。が、実際の需要に応じ、台湾大学に留任した日本人がかなりいた。『台大医学院百年院史(下)系科所史』(1999: 98)によると、1945年終戦の時、真柄を含む日本人スタッフは皆台湾を出て日本へ帰った、という。しかし、当時医学部を接収した台湾側の代表者³⁵⁾杜聡明の『回憶録』(1973: 118)³⁶⁾に、産婦人科の真柄教授は留任の1人だと明記されている。黄等(1995: 166-168)に収録されている真柄が寄稿・黄が中国語訳した「台北八年」という文章に、真柄の、戦争が終わる直前に家族を先に日本に送ったため、戦争が終わってから、帰国したいという意志を示し、1946年3月にようやく願いが叶えられた、という帰国の詳しい経過が述べられている。1947年には順天堂医学専門学校産婦人科教室2代目の教授となっている³⁷⁾。2年後の1949年6月に日本

医科大学主任教授付属病院産婦人科部長に就任、1968年9月に教授退任した³⁸⁾。1961年に日本化学療法学会の会長³⁹⁾、1966年に回日本アレルギー学会の会長⁴⁰⁾をつとめた。氏の確立した真柄術式は日本の婦人科手術の基本術式の1つとして位置づけられている⁴¹⁾。

実は真柄は医者・学者という本務以外、野球もやり、絵も描いた。大学病院が戦時中一時疎開された台北の隣にある桃園大溪というところが好きなので、水墨画の雅号を大溪としたという⁴²⁾。

3. おわりに

日本統治期当時、台湾の病院または医学部産婦人科の3人の責任者は、それぞれそのかわり方や個々人の生涯はさまざまであるが、台湾の近代産婦人科の創立・発展に大きく貢献したことに違いはない。時期でいえば、ちょうど、川添正道は草創期、迎詣は臨床の隆盛期、真柄正直は学術研究重視期、という区切りができようか。3つの時期ともその時代の背景を反映し、まさに医学そのものの発展軌跡と重なっている。つまり、正しい医学(産婦人科)概念がないところ(19世紀末・20世紀初の台湾)に正確な医学(産婦人科)の知識の導入、宣伝、そして制度の建立という草創期から出発した。川添がこの時期の功労者にあたる。住民の医学(産婦人科)への理解が確立したことにより自然と患者が増えていき、彼らに対処する上で臨床上の優れた技術を持つ迎は大きな柱となった(臨床の隆盛期)。その後、臨床の現場を支える研究が必要となってくると、真柄が学術を重要視する態度、及び基礎を築いた(学術研究重視期)。

注

- 1) たとえば、日本人による1897年の調査で、当時の「台湾漢医」は1,070人だと分かる(莊(1996: 630))。
- 2) 1896年に「台北病院」、1897年に「台北病院」と改称した。
- 3) 1899年の台湾総督府医学学校が発端である。
- 4) 顔(2007)。
- 5) 同じく外科から独立したものに耳鼻咽喉科(1902年)、皮膚科(1903年)などがある。

- 6) 「台大婦産科歴史, 亦可謂整個台湾婦産科界的歴史即起源於此」(台大医学院百年院史編輯小組編輯(1999: 97)).
- 7) 『台大医院老百年』(1995: 76), 黄等(1995: 13), 莊(1998: 203-204).
- 8) 台湾大学医学院附設医院(1995: 76).
- 9) 大学自体は1928年に創立された.
- 10) 台湾大学医学院附設医院(1995)『台大医院老百年』(1995: 77). ただし, 莊(1998: 208)では新柄が台湾に就職しに来たのは1938年4月のことだという.
- 11) 『台大医院老百年』(1995: 77)など.
- 12) 1902年に創刊.
- 13) 岡田廉治郎の「副卵巣囊腫ノ一例」である.
- 14) Clay Brit. m. J. 1903. Jan. の原著を「堀内抄」のものである.
- 15) 「医員兼部長」とある. また, 台大医学院百年院史編輯小組編輯『台大医学院百年院史(下)系科所史』(1999: 97). なお, 莊(1998: 96-97; 200-201; 604)にも関連の記述が見られる. ただし, 莊(1998: 97)では川添が産婦人科の責任者となった時は24歳だと述べているが, 同(1998: 201)で川添が26歳の時, 台湾の産婦人科の歴史を開いたとも言っている. 一方, 台湾大学医学院婦産科と台大医院婦産部のホームページともに川添が産婦人科の責任者になったのは24歳だと揭示されている.
- 16) 台湾大学医学院婦産科・台大医院婦産部のホームページともに1898年と揭示されている.
- 17) 莊(1998: 604)によれば, 「1897年7月に台北病院産婦人科が独立し, 川添正道が初代主任とされた」「もとの産科, 婦人科は外科内に置かれていた」「これは台湾における「産婦人科」の開始だ, という.
- 18) 『台湾医事雑誌』には他に1巻7号(1899年8月)の「雑報」, 3巻4号(1901年5月)の「時事」で「川添正道」の名前が見られた.
- 19) 『台大医院老百年』(1995: 76)など.
- 20) 76ページ. また, 黄等(1995: 20), 莊(1998: 203), 台大医学院百年院史編輯小組編輯『台大医学院百年院史(下)系科所史』(1999: 97)にも似たような記述がある. ただし, 旧制官立大学としての長崎医科大学が設立されたのは1923年のこと(長崎大学医学部医学科のホームページによる. 同年にさらに「附属医学専門部及び附属薬学専門を併置した. 県立長崎病院は, 長崎医科大学の附属医院となった.」ともある), 川添が台湾を離れた1914年にはまだ長崎医専だった.
- 21) また, 翌日の漢文の記事に「台北医院医長川添正道氏者番新授博士学位. 将應郷里長崎之聘. 卜来十三日啓程. 氏明治二十四年. 畢業第五高等学校. 歴任長崎沖繩各病院. 二十九年来台. 奉職至今. 首尾十有九年. 前後兩度. 遊学欧洲. 精婦人科. 医校生徒. 慕氏学徳. 屢次懇留. 足以知其為人矣.」と, あらすじのような内容が提示されている.
- 22) <http://www.kawazoe-sanfujinka.com/index.html>
- 23) 篠田秀男「'03/7/21 原文照合, 修正」した「どうして私が世界のエスプレッティストになったか?」という「この論文は東洋薬事報誌上に, 1983年1月号から12月号までの間に書き綴った私の医学修業の歴史を, 大正9年(1920年)の旧制官立山形高等学校入学当時(19歳)の時代から(当時私は桜井の姓を名乗っていた)昭和58年(1983年)7月までの60余年間に亘った私の医学修業の経過を述べたものであり」のもの(http://www.geocities.jp/tsoji/Historio/sinoda_eseo.htm)による. また, 原文は「大局」となっているが, 「入局」の誤植だと思われる.
- 24) この点(また原著の「Kawasoye, M.: Ein Fall von Ureterverf schluss durch Knotenbildung. Ztsch. f. Gynäkol. Urologie.4: 159-169, 1914)については査読委員のご教示をいただいた. ここにて記して感謝する.
- 25) 黄等(1995: 136).
- 26) 黄等(1995: 14).
- 27) この段落の内容は黄等(1995: 24), 『台大医院老百年』(1995: 77)の他, 台大医学院百年院史編輯小組編輯『台大医学院百年院史(下)系科所史』(1999: 97-98)にも提示されている. また, 「台湾に我要らざるか」という日本語は筆者により, 迎が弟子の高敬遠(1915年に迎が台北医院産婦人科のリーダーになって以来初の台湾人医事で, 1919年に医官補になり, 後に薬理学教室で研究を行ない, 博士号を取得. 台湾における初めての産婦人科の開業医.)に言った中国語の「台湾無我可以嗎」の訳である.
- 28) 林(1997: 53)に「昭和十一年 医学専門部 教授 大正三年七月三十一日 任官 昭和十三年三月二十六日 退官 医学博士医学士 迎諧」と, 迎諧の退官時期を明記した退官教授の資料が提示されている.
- 29) 荒木は1963年に真柄が主任だった日本医科大学産婦人科に入局した. また, 原文は「三重県はじまって以来に秀才と噂された」となっているが, 「以来の」の誤植だと思われる.
- 30) 林(1997: 54)に掲載されている医学部教職員一覧(1939年)で「医学部 教授 産科学・婦人科学講座 担任 医学博士医学士 真柄正直 三重」という真柄の出身地などの情報も得られる.
- 31) 1939年の第一号に真柄により「創刊号の辞に代へて」に「台湾産科婦人科学会は創立以来既に三年を経過した」とあるように, 学会の創立は真柄が台北帝国大学に赴任した年だと分かる. 管見の限り, 『台湾産科婦人科学会会報』は第一号と第二号しか見当たらない.
- 32) 昭和16年4月15日の台北帝国大学の「学内通報」(第二百六十三号)による.
- 33) 黄等(1995: 160)に, 1936年に大井富美と結婚と記載されている.

- 34) 『最新産科学』「手術編」第六版(1972)の訳である。
 35) ちなみに、日本側の代表者は台北帝国大学医学部
 末代部長の森於菟(森鷗外の長男で、解剖学が専門)
 である。森於菟については王(2009)が詳しい。
 36) 杜聡明については王・林(2009)が詳しい。
 37) 順天堂大学大学院 [http://www.juntendo.ac.jp/graduate/
 laboratory/labosanfujin/k2.html](http://www.juntendo.ac.jp/graduate/laboratory/labosanfujin/k2.html)
 38) <http://www.nms.ac.jp/nms/obgyn/school/>
 39) 日本化学療法学会 [http://www.chemotherapy.or.jp/meeting/
 higashi/rekidai.html](http://www.chemotherapy.or.jp/meeting/higashi/rekidai.html)
 40) 木下(2006).
 41) 日本医科大学付属病院 [http://www.nms.ac.jp/nms/obgyn/
 school/gaiyou.html](http://www.nms.ac.jp/nms/obgyn/school/gaiyou.html)
 42) 黄等(1995: 164-167).

参考文献

中国語

- 文淵閣. 四庫全書。(原版清；2005年迪志文化出版有限公司電子版)
 杜聡明. 回憶録. 杜聡明博士奨学基金管理委員会；1973.
 黄思誠等. 台大医院婦産科百年史料輯録. 台大婦産科同
 門会；1995.
 台湾大学医学院附設医院. 台大医院老百年. 1995.
 台湾大学医学院附設医院. 台大医院百年懷旧. 1995.
 莊永明. 台湾紀事 下. 二版. 時報文化出版；1996.
 林吉崇. 台大医学院百年院史(上) 日治時期(一八九
 七—一九四五年). 台湾大学医学院；1997.
 莊永明. 台湾医療史—以台大医院為主軸. 遠流出版；
 1998.
 台大医学院百年院史編輯小組編輯. 台大医学院百年院
 史(下) 系科所史. 1999.
 李東華. 光復初期(1945-1950)的民族情感與省籍衝突—
 從台湾大学的接收改制做觀察. 台大文史哲學報 第65
 期；2006. [http://homepage.ntu.edu.tw/~bcla/e_book/65/
 65_06.pdf](http://homepage.ntu.edu.tw/~bcla/e_book/65/65_06.pdf)
 顏裕庭. 110年来的台大医学院. 楓城新聞與評論 167期；
 2007. http://www.mc.ntu.edu.tw/epaper/167/epaper_167_61.htm

王敏東. 影響台湾医学的日本人—以台北帝大解剖学專
 長之領導者為中心一. 台湾史料研究 32；2009.
 台湾大学医学院婦産科 [http://www.mc.ntu.edu.tw/main.
 php?Page=A4B1CF](http://www.mc.ntu.edu.tw/main.php?Page=A4B1CF)
 台大医院婦産部 <http://ntuh.mc.ntu.edu.tw/obgy/content/1.htm>

日本語

- 台湾人物誌。(原本1894~1945年；2004漢珍数位公司
 電子版)
 読売新聞社. 読売新聞。(原版1894~1945；CD-ROM
 1999~2002)
 台湾総督府史料編纂委員会. 台湾史料稿本。(原本1895~
 1919年；(台湾)国立中央図書館資料庫)
 台湾医事雑誌。(原本1899, 1900；(台湾)国立中央図書
 館資料庫)
 台湾日日新報社. 台湾日日新報。(原本1898~1944；影
 印本1995年(五南出版)；2005大鐸資訊股份有限公司
 電子版)
 台湾医学会. 台湾医学会雑誌。(原本1902~1945；漢珍
 数位図書電子版)
 台北帝国大学. 学内通報；第263号。(1941年4月15日)
 台湾産科婦人科学会会報。(原本1939；(台湾)国立中
 央図書館資料庫)
 王敏東. 台湾の医学に影響を与えた日本人—耳鼻咽喉
 科の場合一. 日本医史学雑誌 2008；54：275-280
 王敏東・林益泓. 台湾における“日本式”の用語につい
 て—杜聡明氏の用語から—. 台湾日本研究 2009；2
 木下真二. アナフィラキシーショック時の循環動態.
 第16回日本アレルギー学会総会ショック・シンポジ
 ウム. 2006. <http://www5f.biglobe.ne.jp/~kinosita/m612.htm>
 荒木勤. 私の恩師, 真柄正直(しんからしょうじき)先
 生. 2007. <http://college.nms.ac.jp/president/column.php?id=464>
 長崎大学医学部医学科 [http://www.med.nagasaki-u.ac.jp/
 med/intro/enkaku.html](http://www.med.nagasaki-u.ac.jp/med/intro/enkaku.html), [http://www.7andy.jp/books/detail/
 ?accd=32052761](http://www.7andy.jp/books/detail/?accd=32052761)
 紙幅の都合で文中に言及されている川添正道, 迎諧,
 真柄正直の著書は再掲しない。

付 録



『台湾日日新報』(1914年6月26日)に登載されている川添正道氏の写真

Japanese who Affected Modern Medicine in Taiwan: Obstetrics and Gynecology

WANG Ming-tung

Department of Applied Japanese, Ming Chuan University

This text describes the leaders who established the modern obstetrics and gynecology for Taiwan. during the Japan-colonizing period (1895–1945). These leaders are Mr. Kawasoye, M., Mr. Mukae K., and Mr. Magara M.

The lives of these leaders were different, but they all strongly contributed to the development of modern obstetrics and gynecology in Taiwan. With regard to the passage of time, Mr. Kawasoye contributed the initial efforts, Mr. Mukae worked during the flourishing period of the clinic; and Mr. Magara worked during the mature period, emphasizing research. These three periods are closely correlated with the course of the development of modern obstetrics and gynecology in Taiwan.

Key words: Taiwan, obstetrics and gynecology, leaders